

人工知能と未来の教育

中邑賢龍

いま誕生した子どもが父親になるであろう 2045 年頃には、人工知能 (AI : Artificial Intelligence) が人間の知能を超える技術的特異点 (シンギュラリティ) を迎えると予測する科学者がいる。すでに社会ではその兆候が見え始めている。スマホに向かって質問をすればクラウドの人工知能が答えてくれる。オンラインで本を注文すれば、関連する本まで紹介してくれる。日用品が切れそうになれば自動的に家に配送し、子どもが無事に学校に到着すれば知らせてくれるサービスもある。人間とテクノロジーの新しい暮らしが始まっている

一方、学校の中では相変わらず ICT を活用して勉強を効率的に教える実践が中心で、こういったサービスを活用して能力を増強するという流れには否定的である。教育は人間の潜在的能力を最大限に引き出す事と考え、テクノロジーの活用はそれを妨げると考える人も多い。

眼科領域では視力と言えば矯正視力を指し、眼鏡等で日常生活に支障のない矯正視力が得られれば裸眼視力は問題とされないと言う。一方、知能に関して言えば、タブレット PC やスマホを使って知能検査を受ける事は認められない。裸の知能 (裸知能とここでは呼ぶ)こそが知能であり、テクノロジーで矯正した知能は認められていない。発達に遅れのある子どもに対しては、その可能性を信じてその能力を伸ばす教育が主流である。脳の可塑性に期待し、能力開発を進める事は必要な事であるが、社会のニーズも変化してきている。かつて求められた記憶・知識などの能力は、クラウド上で知の共有が実現された事であつてほど重要でなくなっている事を認識する必要がある。発達の遅れの無い子どもにとっても同様である。興味があり、得意な分野に注力し、さらに能力を伸ばす上でも一部の能力のエンハンスにテクノロジーを活用することは悪くない。

ここで述べている事はかなり乱暴な話ととらえる人が大半であろう。しかし、若者達はスマホを使いこなし、それを日々の生活に活用している。50年前の SF 小説の話が実現している。その中で教育だけが停まっていいいのだろうか。教育が技術を後追いするようでは教育が陳腐化する恐れがある。技術の進展を予測して子ども達の何を教えるべきかを考える時代が来ている。未来の子ども達のためにも未来の先生達と新しい教育を論じる場に魔法プロジェクトがなればと思う。